

## 〔若手研究者よりの報告〕

マラルメと舞踊  
——詩と舞踊との架橋の試み

村上由美

19世紀フランスの詩人、ステファヌ・マラルメ (Stéphane Mallarmé, 1842-1898) の詩的創造と舞踊の問題について、これまで文学研究と舞踊研究の立場から取り組んできた拙論をもとに紹介する。

## マラルメの舞踊論を読み解くためのアプローチ

1990年代の身体論の興隆と時を同じくして、マラルメ研究においても舞踊のテーマがにわかに脚光を浴びるようになった。そこで展開されたのは、(渡邊守章による舞台芸術研究を除き) 主に哲学的考察であり、抽象的な議論が多かった。そのため本研究では、渡邊守章の研究をうけ、マラルメの舞踊研究の不足を実証面から補うことを考えた。19世紀末の舞踊について資料調査をおこなうことを通して、マラルメの言説を実証的に支えてゆくことができると考えられたからである。マラルメの舞踊論は、一見したところ詩的散文のようであるが、実際に鑑賞した公演を対象に展開されているという点で、具体性をもった評論でもある。マラルメがバレエを鑑賞し、評論を書いたのは19世紀末のことであるが、この時代はバレエがとくに衰退期にあり、舞踊研究者からは研究対象として着目されることも少なく、情報も乏しかった。そのところを克服し、マラルメが鑑賞した時代の舞踊を精査することによって、以下のとおりマラルメの言説を読み解くことができるのである。

## マラルメにおける詩と舞踊

## ——研究方法とその成果

拙論では、三つの点から研究をすすめた。第一に、「マラルメにおける舞踊のイメージの特定」、第二に、「マラルメの詩的散文をいかに解釈するか」という点から、マラルメの舞踊論がもつ特異性や革新性を明らかにし、そのうえで、第三に、「マラルメにおける舞踊とは何か」という問題に迫る。

第一の点については、実証研究としてマラルメ

が鑑賞したバレエ作品を調査した。これにより、上演録、写真、台本の挿絵等から、マラルメのイメージするバレエ像を視覚的に指摘することができた(註1)。

第二の点については、マラルメによる書き換え(評論文から詩的散文への推敲)を語彙レベルで分析することで、詩人の思索の経路を明らかにした。この生成過程の分析の過程で、マラルメが踊り子の身体表現に象徴的意味を読み取り、足先のステップを言語に見立てることで、踊りを解読していたことを示した(註2)。

第三の点では、詩論として舞踊評論を読み解いた。まず、マラルメの舞踊論が詩論の性質をあわせ持つことを論じたうえで、マラルメの詩作品を支える詩学が、マラルメの舞踊思想の形成に大きく影響したことを示した。また同時に、舞踊をめぐる思索そのものが、その詩学の形成にも深く作用している点を明らかにした(註3)。

以上のように、拙論では、詩と評論の連続性を、舞踊をとおして析出し、マラルメの舞踊思想を構築することを試みた。結果、マラルメの舞踊の観念とは、通常の舞踊論の枠組みには留まらず、詩人の詩的創造において重要な意義と価値を担うものであると位置づけられた。こうした捉え方(方法と視点)は、ほかの作家も含めたより広いコーパスのもとで再検討される可能性を秘めている。舞踊の詩学が、ほかの作家(例えば、ポール・クローデルやポール・ヴァレリーなど)の諸作品からも析出され、その普遍性を証明することができるなら、舞踊の観点から文学史を新たに塗り替えてゆくこともありうるのではないかと期待するのである。

1) 村上由美「ステファヌ・マラルメのバレエ評論の再読解——失われたバレエ『ヴィヴィアーン』とマラルメのバレエ論をめぐって」、『演劇博物館グローバルCOE 紀要演劇映像学2010』、早稲田大学演劇博物館グローバルCOE プログラム、第1集、pp.91-109、2011年3月。

2) 村上由美「マラルメにおける薄布の役割——舞踊の問題を中心に」、『フランス語フランス文学研究』、日本フランス語フランス文学会、第108号、pp.125-142、2016年3月。

3) 村上由美「マラルメにおける〈裸体〉の問題——「エロディアド」ならびに舞踊評論からの分析をとおして」、『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』、日本フランス語フランス文学会関東支部、25号、pp.69-82、2016年12月。